ベルツの黄禍論批判とその特徴

髙辻　正久

1.　はじめに

19 世紀末から 20 世紀初頭の欧米諸国の論壇において、黄禍論（die „gelbe Gefahr“）と呼ばれる議論が現れた。黄禍とは、黄色人種とその国家である中国・日本等の近代化による台頭が白色人種とその国家にとって脅威となるという考えで、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世（Wilhelm Ⅱ, 1859-1941）が 19 世紀末から積極的に喧伝して広めた。そして、日露戦争（1904-1905）後は、欧米諸国にとって日本が黄禍の中心となった [1)]。

黄禍論がヴィルヘルム二世によって欧米諸国の論壇に広がる以前（19 世紀後半）の日本とドイツの関係は、医師のエルヴィン・フォン・ベルツ（Erwin von Bälz, 1849-1913）をはじめ、法学者のヘルマン・ロエスレル（Hermann Roesler, 1834-1894）、地質学者のエドムント・ナウマン（Edmund Naumann, 1854-1927）等多くのお雇いドイツ人教師が来日し、また森鷗外（1862-1922）、細菌学者の北里柴三郎（1852-1931）等多くの日本人がドイツに留学するなど「教師と生徒の関係」がしばしば比喩として用いられるような友好関係だった。しかし、日清戦争（1894-1895）における下関条約に対するフランス・ロシア・ドイツの三国干渉（1895）をきっかけに、両国の関係は悪化していく。そして、1914 年に第一次世界大戦が勃発すると、日本は日英同盟を根拠にドイツに宣戦布告し、両国は交戦するまでになった。

黄禍論も三国干渉と同様に日独関係を悪化させ [2)]、森鷗外や岡倉天心（1863-1913）等多くの日本人がそれを批判した。また、当時お雇い外国人として日本に滞在していたベルツも、黄禍論に対しては批判的だった。

1)　飯倉（2013）、43 ページを参照。
2)　工藤 / 田嶋（2008）、157 ページを参照。

黄禍論は上述したように、ドイツ皇帝であるヴィルヘルム二世が喧伝し広めた議論だったが、ドイツ人のお雇い外国人という立場だったベルツの黄禍論批判は、どのようなものであっただろうか。また、当時の日本人による黄禍論批判と比較した場合、何か相違点があるだろうか。相違点があれば、それにはドイツ人のお雇い外国人という彼の立場が反映されているだろうか。

本稿では、ベルツの黄禍論批判と日本人の黄禍論批判を、彼らの論文・日記等を手掛かりに比較し、それにより当時のドイツ人のお雇い外国人の立場を垣間見ることを試みたい。

2.　黄禍論発生の背景と 19 世紀後半の日独関係

2.1.　黄禍論発生の背景

まず、19 世紀末にヨーロッパで黄禍論が発生し広がった背景について述べる。

黄禍とは何か。国際政治学者の飯倉章は、黄禍について「十九世紀の終わりから二十世紀のはじめ、第一次世界大戦頃にかけて西洋世界に流布した、黄色人種とその国家である日本や中国の勃興が、白色人種やその国家に脅威となるという考えやイメージを表したもの」[3] と定義している。

欧米諸国にとって黄禍の脅威とは、具体的には経済的な脅威および軍事的な脅威だった。経済的な脅威とは、中国や日本からの低賃金労働者が欧米の白人労働者の職を奪い、彼らの低価格商品が欧米諸国の市場を撹乱するのではないかという懸念である。また、軍事的な脅威とは、同じ黄色人種の国家である中国と日本が同盟を結び、欧米の勢力をアジアの植民地から駆逐して欧米諸国に迫るということに対する懸念だった [4]。

黄禍論が 19 世紀末から 20 世紀初頭に欧米諸国の論壇に流布するきっかけとなったのは、1895 年の夏頃にドイツ皇帝ヴィルヘルム二世が画案を作成し、宮廷画家ヘルマン・クナックフス（Hermann Knackfuß, 1848-1915）に仕上げさせた寓意画「ヨーロッパの諸国民よ、諸君らの最も神聖な財産を守れ！（„Völker Europas, wahrt eure heiligsten Güter!“）」（図）であった。この寓意画には、黄禍に対する西洋の戦いはキリスト教の聖戦であるというヴィルヘルム二世の考えが表され

3)　飯倉（2004）、9 ページより引用。
4)　飯倉（2013）、42-43 ページを参照。

ていると言われる。たとえば、絵の左上に描かれた光り輝く十字架と中央右寄りに立つ大天使ミカエル、そして右側に小さく描かれた仏陀がそれを示している。ただし、ここでは仏教で東洋の宗教を代表させるという単純な発想が用いられている[5)]。

図 „Völker Europas, wahrt eure heiligsten Güter!“（1895）
（「ヨーロッパの諸国民よ、諸君らの最も神聖な財産を守れ！」）

出典：Wikimedia Commons, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Voelker_Europas.jpg（参照日：2017/01/24）

ヴィルヘルム二世は、この寓意画をロシア皇帝ニコライ二世等各国の君主に贈り、またオットー・フォン・ビスマルク（Otto von Bismarck, 1815-1898）等ドイツ国内の政治家たちにも配布した。さらに、この絵をグラビア印刷し、ドイツ極東汽船の船内に取り付けるなどいたるところに流布させた[6)]。この寓意画は、のちに「黄禍の図」と呼ばれるようになる。

ヴィルヘルム二世がこのように黄禍を喧伝した主な目的は、ヨーロッパにおけ

5) 飯倉（2004）、77-83 ページを参照。
6) Vgl. Gollwitzer (1962), S.207.

るドイツの孤立を解消することと、ロシアを東アジアに従事させることにより、ヨーロッパにおけるロシアの脅威を少なくすることだった[7]。また、彼自身は白色人種の優越を主張する一種の人種理論の普及者でもあった[8]。

もっともドイツの歴史学者ハインツ・ゴルヴィツァー（Heinz Gollwitzer, 1917-1999）によれば、「黄禍」という言葉はヴィルヘルム二世が作った言葉ではなく、この寓意画が描かれる少し前からすでにヨーロッパに存在していたという。ゴルヴィツァーは、「黄禍」という言葉は 1895 年にフランスで発生したと推定している[9]。しかし、ヴィルヘルム二世が作成したこの寓意画は、黄禍論の宣伝に大いに貢献した[10]。

欧米諸国にとって黄禍の脅威は、黄色人種の国家の中でも膨大な人口と資源を有する中国の近代化が最初は中心だったが、1904 年から 1905 年にかけて日本が韓国・満州の支配をめぐる日露戦争でロシアに勝利すると、日本が脅威の中心となった[11]。当時のドイツ人にとっても、日露戦争における日本の勝利の印象は強烈だったと言われる[12]。その後、黄禍論は第一次世界大戦（1914-1918）まで欧米諸国の論壇を賑わせた。

2.2.　19 世紀後半の日独関係

次に、黄禍論が発生し拡大する以前の 19 世紀後半における日独関係について述べる。

日本とドイツが最初に国交を結んだのは、1861 年の日普修好通商条約である。それは、当時 35 の王国・公国と 4 つの自由都市からなっていたドイツ連邦の中で最大規模のプロイセン王国との修好通商条約だった。そして、1867 年の北ドイツ連邦成立、1871 年の国家統一によるドイツ帝国成立後も、条約は改定されて引き継がれた。

明治時代になった 1868 年以降、ドイツに留学する日本人が増えていき、ドイツからもお雇い外国人として来日するドイツ人が増えていった。お雇い外国人と

7)　飯倉（2004）、55-58 ページを参照。
8)　橋川（2000）、26 ページを参照。
9)　Vgl. Gollwitzer (1962), S.42-46.
10)　Vgl. Gollwitzer (1962), S.206-207.
11)　飯倉（2013）、43 ページを参照。
12)　Vgl. Delank (1996), S.30.

は、明治時代の日本が欧米先進諸国の近代的な諸制度・学問・技術を導入するために、政府がその教師として招聘した外国人である[13]。日本人のドイツへの留学およびお雇い外国人としてのドイツ人の来日は、1880 年代前後が特に多かった[14]。この時期の日独関係は、法学・医学・哲学・軍事学などの学術的な領域に集中していて、ドイツから日本への単方向的な文化移転という性格を持っている[15]。

国交を結んだ日本とドイツが国際政治の舞台で最初に対峙するきっかけとなったのは、1894 年に勃発した日清戦争だった。日本は、日清戦争において朝鮮の支配権をめぐって清国と戦い勝利し、1895 年 4 月の下関条約において清国から遼東半島を要求する。しかし、下関条約調印（1895 年 4 月 17 日）の 6 日後の 1895 年 4 月 23 日に、フランス・ロシア・ドイツの三国が、武力を背景に日本に対して遼東半島を清国へ返還することを勧告し（三国干渉）、日本政府はやむなくこれに従うことを決定した。

ドイツが三国干渉に加わった理由は、東アジアにおけるドイツの発言権を確保するためだった。また、黄禍論の喧伝の目的と同様に、ロシアの関心を東アジアに向けさせることにより、ドイツの安全性を高めることが目的だった[16]。

しかし、三国干渉へのドイツの参加は、それまでドイツと友好関係にあり近代化のモデルとして多大な影響を受けてきた日本にとってショックの大きいものであり、これに対する官民の反発は非常に激しかった[17]。しかも、ヴィルヘルム二世が上述の「黄禍の図」と呼ばれる寓意画を作成したのは、この三国干渉が行われた直後の 1895 年夏頃である。この寓意画が日本に知られるようになったのは、遅くとも 1895 年の終わりから 1896 年の初め頃と飯倉は推定している[18]。これ以降、日独関係は第一次世界大戦（1914-1918）まで悪化していった。

3.　ベルツの黄禍論批判

次に、黄禍論に対するエルヴィン・フォン・ベルツの批判について、彼の日記

13) 梅溪（2007）、246 ページを参照。
14) 国立歴史民俗博物館（2015）、192 ページを参照。
15) 工藤 / 田嶋（2008）、4 ページを参照。
16) 工藤 / 田嶋（2008）、9 ページを参照。
17) 工藤 / 田嶋（2008）、10 ページを参照。
18) 飯倉（2004）、95 ページを参照。

および論文を手掛かりに見ていく。

ベルツは、1872 年にライプツィヒ大学医学部を卒業後、同大学病院で医師を務めていた。そこで日本人留学生の相良元貞（1841-1875）を診察したことをきっかけに、日本との縁ができた。そして、1876 年に明治政府に招聘され、東京医学校（現在の東京大学医学部）で医学を教えるために来日し、1905 年まで 29 年間日本に滞在して日本医学の発展に尽くした [19]。

ベルツは、日本滞在期間中に日記をつけていた。そして彼の死後に、その日記を息子のトク・ベルツ（Toku Bälz, 1889-1945）が編集し、„Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan“（『黎明期日本におけるあるドイツ人医師の生活』）として 1931 年に刊行した。この日記には、ベルツの黄禍論に対する批判や日独関係の悪化を憂慮する記述がいくつかある。

たとえば 1904 年 5 月 12 日付の日記では、ヴィルヘルム二世の黄禍論の喧伝を批判している。

> ドイツにおける外交的機略の欠如には、まったく泣き出したいくらいだ。政府筋では明白なロシアびいきにより（そうでなくとも無関係な事がらに万事干渉するため、すでにドイツに対してある程度ふくむところのある）日本人の感情を、いよいよ害している。すなわち日本人は、皇帝を黄禍論の提唱者として恨み、これを重大な侮辱と考えているのだ。[20]

この日記が書かれた 1904 年 5 月は、日本とロシアが交戦しているときだった。そのような中ベルツは、ドイツ政府がロシアのひいきをして日本人の感情を一層害していると嘆いている。ドイツ政府は、日露戦争において公式には中立を宣言していたが、ロシアのヨーロッパおよび近東への関心を東アジアに逸らすために、ロシアの後押しをする政策を行っていた。たとえば、民間海運会社ハンブルク＝アメリカ汽船会社のバルチック艦隊に対する石炭供給契約を黙認し、大きな便宜

19) 島谷（2012）、194-195 ページを参照。

20) 日本語訳は菅沼（1979）、下巻 73 ページより引用。下線は筆者による。なお、Bälz (1931) ではこの部分は削られている。菅沼（1979）の「訳者あとがき」によれば、ドイツで発表をはばかる批判を述べた部分は、Bälz (1931) では相当に省略または削除された。菅沼は、ベルツの息子トク・ベルツから直接託された原稿から訳している。

をロシアに与えた。また、このような親露政策は、黄禍論を喧伝していたヴィルヘルム二世によって感情的にも支持されていた[21)]。

そして、この 4 ヵ月後の 1904 年 9 月 11 日付の日記で、ベルツは当時の日本人のドイツ人に対する憎悪の高まりを嘆いている。

> 遺憾ながら、日本人がその敵国ロシアの同盟国たるフランスの人間よりも、われわれドイツ人の方をいっそう憎んでいるのは事実だ ― 否、それどころか、多数の日本人の公言するように、ロシア人よりもひどくわれわれを憎んでいるのだ！日清戦争のドイツの干渉と膠州湾の占取以外に、これはドイツ皇帝がつねに露骨に示される黄色人種への反感のせいだ。[22)]

この日記が書かれた 1904 年 9 月は、1895 年に三国干渉およびヴィルヘルム二世による黄禍論の喧伝が起こってから 9 年経っている。ここでは、日本人が当時交戦しているロシアとその同盟国であるフランスよりもドイツを憎んでいると書いていて、日独関係の悪化に対するベルツの憂慮が強く表れている。

ベルツはまた、三国干渉と並んでヴィルヘルム二世の黄色人種に対する反感を、日独関係悪化の原因と見なしている。この点に関して、彼はヴィルヘルム二世が義和団事件（1900）[23)] に際し中国へ派遣されるドイツ遠征軍に対して行った「フン族演説」（Hunnenrede）を、1900 年 8 月 1 日付の日記において激しく批判している[24)]。ヴィルヘルム二世はこの演説の中で、かつてフン族がヨーロッパ諸国民を恐れさせたように、ドイツ遠征軍は中国軍に対して厳しい姿勢をとるように説いた。そのとき彼は、敵に対して情け容赦は無用で、皆殺しにせよと言っている[25)]。ヴィルヘルム二世はこの演説やその他の演説により黄色人種に対する嫌悪をあらわにし、それらが日独関係に悪い影響を与え続けた[26)]。

---

21) 工藤 / 田嶋（2008）、12 ページを参照。
22) 日本語訳は菅沼（1979）、下巻 168 ページより引用。なお、Bälz (1931) ではこの部分は削られている。注 20 を参照。
23) 1900 年に列強の進出に抗した中国民衆の排外運動。日本とドイツを含む 8 ヵ国の連合軍の出兵を招き、鎮圧された。
24) Bälz (1931), S. 157.
25) 川島（2010）、31-35 ページを参照。
26) Vgl. Pekar (2003), S. 67.

黄禍論と日独関係に関して、ベルツは日本から帰国後、1906 年に „Die deutschfeindliche Stimmung in Japan und ihre Ursachen“（「日本における反独感情とその原因」）という論文を書いている。この論文において、彼は日本におけるドイツへの不信・憎悪に対してその原因を解明する必要があることをドイツ人に訴えている。

> 現在のところ深く根を張った、日本のドイツに対する不信、それどころか、この明白な憎悪に当面して、その根源を究めることは、われわれドイツ人にとって極めて重要な事がらである。われわれはドイツの新聞紙上に、日本の新聞の憤激振りが翻訳転載されたのをしばしば見受けるが、しかしそのずっと深い原因の分析は、遺憾ながらいまだかつて現われなかったし、事実、そんな分析は試みられたことすらなかった。しかもこのような分析こそは、この不可思議な現象を理解するための根本的条件なのである。あえて不可思議と称するゆえんは、二十年前はまだ、ドイツは日本で非常な好感をもたれていたからである。[27)]

この論文が書かれる 20 年前と言うと 1880 年代で、上述したように、日本人のドイツへの留学およびお雇い外国人としてのドイツ人の来日が特に多かった時期だった。

そして、日本人のドイツに対する感情を具体的に示すために、ベルツは初代内閣総理大臣 伊藤博文（1841-1909）の次のような意見をこの論文に引用している。

> 「以前は、われわれもドイツに大変好感をいだいていて、種々の点でドイツを手本とし、先生としたものです。ところが、われわれは日清戦争の大勝利の後で、われわれの勘違いをしていたこの友邦がロシア、フランスと力を併せて、われわれの手から苦心惨憺して得た勝利の賜物を奪い去る ― という目に遭わねばなりませんでした。［中略］おまけに、間もなく偶然のことから、ドイツ政府があの行動に出たのは、単に政治上の原因によって操られたばかりではなく、われわれ日本人に対する個人的の、しかも堂々と誇示された反感もまた重要な役割を演じ

27) Bälz (1931), S. 247. 日本語訳は菅沼（1979）、上巻 318 ページより引用。下線は筆者による。

ていたことがわかったのです。

ドイツ皇帝は、ご自身のお描きになった絵の上でヨーロッパ文明の最も神聖な財宝が蒙古人によって脅かされていると説明せられました。この場合、誰あろうわれわれ日本人をお指しになったことは疑いのないところです。なぜなれば、無気力の清国ではなく、頭をもたげて来た国日本こそ脅威的だったからです。しかも、あなた方の皇帝のこの絵の中でわれわれは「放火殺人者」なる立派な役割で表わされています。ところで、周知のように、ドイツの外交政策は皇帝のご人格と一致しています。ですから、日本国民があなた方の皇帝のご人格およびそれと関連した政策に対して深い不信をいだいているのもあえて驚くには当りません。」[28)]

伊藤は、三国干渉へのドイツの参加とともに、ヴィルヘルム二世の黄禍論喧伝が日本人のドイツに対する不信感を高めていると述べている。実際、伊藤は1901年12月にイギリスにおいてヴィルヘルム二世の寓意画「黄禍の図」を見ていて、そのときも寓意画の中の仏陀を指して「これは日本である」と言っている[29)]。伊藤の意見に対し、ベルツは日本人の大多数が同様に感じていて、これを改善するためには非常な努力が必要であることと、東アジアにおけるドイツの利益が非常に損なわれたことを、この引用のあとに述べている[30)]。

なお、この論文はドイツの新聞に寄稿されたが、政治的な考慮から掲載を拒否されている[31)]。

黄禍論に関してはこの他に、1904年1月19日付のベルツの日記に、黄色人種であることが外交上いかに不利であるかという政治家の伊東巳代治（1857-1934）の意見が書かれている。また、ここでは日本の東アジアにおける野心に対するベルツの考えも述べられている。

今日、伊東巳代治に会った。話が時局に及んだ。［中略］「いうまでもなく、わ

28) Bälz (1931), S. 248-249. 日本語訳は菅沼（1979）、上巻319-320ページより引用。下線は筆者による。
29) 飯倉（2004）、91-95ページを参照。
30) Vgl. Bälz (1931), S. 250.
31) Vgl. Bälz (1931), S. 247.

れわれの根本的に不都合な点は、われわれが黄色人種であることです。もしあなた方と同様、白人であったならば、われわれがあのどんらん飽くことなきロシアに向って大声一番止まれと叫べば、全世界は定めしわれわれに歓呼の声援を惜しまぬことでしょうに。」

この痛切な言葉の中には、多くの真実がある。しかしながら、他面においてまた、日本人の決して忘れてならないのは、日本人がその黄色人種の指導者たらんと願っていることであり、東アジアにおけるその盟主たるの地位が、多数日本人の念頭を離れぬことである。[32)]

ベルツは一方で、日本人が欧米人の黄色人種に対する差別的な言動に対して公正でないと感じていることに理解を示している。しかし他方で、彼は日本の東アジアにおける指導的な地位を多くの日本人が望んでいることを認めていたようだ。この記述は、日本がこののちの太平洋戦争（1941-1945）時に、アジア支配を正当化するために「大東亜共栄圏」のスローガンを唱えたことを想起させる。また、ベルツは日本の近代化に関して、その急速さに対する驚きを来日した年の1876年10月25日付の日記に「昨日から今日へと一足飛びに、われわれヨーロッパの文化発展に要した五百年たっぷりの期間を飛び越えて、十九世紀の全成果を即座に、しかも一時にわが物にしようとしている」[33)]と書いている。これらの記述を見ると、ベルツは日本による黄禍が将来起こりうることを否定していなかったことがうかがえる。

4.　日本人の黄禍論批判

次に、日本人による黄禍論批判を見ていく。ここでは、日本国内で比較的有名であり、ベルツによる黄禍論批判とほぼ同時代（20世紀初頭）に行われたという観点から、森鷗外の講義『黄禍論梗概』（1904）と東洋史学者の桑原隲藏（じつぞう）（1871-1931）の論文「黄禍論」（1913）を取り挙げる。

32) Bälz (1931), S. 271-272. 日本語訳は菅沼（1979）、上巻367-368ページより引用。下線は筆者による。

33) Bälz (1931), S. 27. 日本語訳は菅沼（1979）、上巻45ページより引用。

4.1. 森鷗外の黄禍論批判

森鷗外は、東京医学校（現在の東京大学医学部）在学中に、ベルツに学んでいる。また、陸軍軍医として 1884 年から 1888 年までドイツに留学した。

鷗外は 1903 年 11 月 28 日に、早稲田大学で「黄禍論梗概」というテーマで課外講義を行った。講義の内容は、ドイツ人の学者ヘルマン・フォン・サムソン＝ヒンメルスチェルナ（Hermann von Samson-Himmelstjerna, 1826-1908）の『道徳問題としての黄禍』（Die Gelbe Gefahr als Moralproblem, 1902）という著作の紹介とその内容に対する批判である。この講義内容は、翌 1904 年 5 月に『黄禍論梗概』のタイトルで単行本として刊行された。

鷗外は『黄禍論梗概』の例言において、白禍[34]は存在するが黄禍は無いと述べている。

> 青眼[35]もて白人を視、白眼[36]もて黄人を視る。乃ち新語を造り出して黄禍と云ふ。安ぞ知らん、北のかた愛琿に五千の清人を駆りて、黒龍江水に赴きて死せしめ、南のかた旅大を蚕食して、陽に租借と称するは、人道に逆ひ、国際法を破ること、殆ど人の意料[37]の外に出づるを。予は世界に白禍あるを知る。而して黄禍あるを知らず。[38]

鷗外はまず、白色人種の黄色人種に対する差別的な態度を批判している。政治学者の橋川文三（1922-1983）も、黄禍について「白色人種の黄色人種に対する恐怖、嫌悪、不信、蔑視の感情を表現したものであることは間違いなく、それが人種的偏見、人種的差別というカテゴリイに属する現象であることも論ずる必要はない」[39]と述べている。

そして白禍の例として、義和団事件の際に満州に出兵したロシア軍による中国人の大量虐殺を挙げ、ロシアの侵略行為を人道に逆らい国際法を破っていると批

34) 白色人種が有色人種におよぼすわざわいのこと。
35) 訪れた人を歓迎する気持ちを表す目つきのこと。
36) 冷淡な目つきのこと。
37) 予想のこと。
38)『鷗外全集』第二十五巻、537 ページより引用。旧字体は新字体に改めた（以下同様）。注および下線は筆者による。
39) 橋川（2000）、7 ページより引用。

判している。

また、次の記述では、欧米諸国で流布している黄禍論について日本人が知ることの必要性を訴えている。

> 吾人黄色人は、先頃の北清事変[40]でのやうに、往々白人等と轡を並べて進んで、却つて他の黄色種族と争ふやうな勢になつて居りますが、又現に英国と同盟して、東洋の平和を維持しやうと勉めて居りますが、此同盟国や我邦に対して昔から多くの同情を持つて居る米国は姑く置くとして、一般の白人種は我国人と他の黄色人とを一くるめにして、これに対して一種の厭悪若くは猜疑の念をなして居るのでござりますから、吾人は嫌でも白人と反対に立つ運命を持つて居ることを自覚せねばなりませず、これを自覚すれば、所謂黄禍の研究は即ち敵情の偵察でござりまして、兵家に申させると、彼を知る一端なのでござります。[41]

白色人種は日本と中国等それ以外の黄色人種の国をひとまとめにして厭悪しているので、われわれ日本人が彼らと敵対することは避けられない。したがって、黄禍を研究することは、白色人種を知るために必要なことだと述べている。また、日本とロシアの戦争は避けられないだろうということと、もし実際に戦争が起こったら、日本がロシアに負ければ白色人種は黄禍を未然に防いだと言い、日本が勝てば彼らは黄禍論を持ち出すだろうとこのあとに述べている[42]。この講義が行われたのは、日露戦争開戦の 3 ヵ月前だった。

さらに次の記述では、サムソン＝ヒンメルスチェルナの黄禍論の正当性について検討し、否定している。

> 論者の所謂黄禍の平和的方面は、西洋人が道徳の根本を誤つて社会問題を生じて、商業工業の上で競争が出来ないやうになりさうだと云ふのでござります。果してさうなら、気の毒ながら罪は彼に在ります。そんなら戦争的方面はどうかと云ふと、西洋人が妄に支那に利益圏を作つて、不正な政策を行つて居るが、早晩それ

40) 1900 年に起こった義和団事件のこと。
41)『鷗外全集』第二十五巻、539-540 ページより引用。
42)『鷗外全集』第二十五巻、540 ページを参照。

> が行はれなくなりさうだ。即ち利益圏から逐ひ出されさうだと云ふのでござります。これは単に利益圏のみではありません。租借地といふものに至つては一層甚しいやうでござります。これも罪は彼に在ります。さうして見れば、黄色人が白人を圧倒するのは正理の勝利で、彼は黄禍などと云はずに、黄福とでも云つて、難有く所謂支那に向つて踵を旋す改良策を行ふが好いではありませんか。[43)]

ここで言われている黄禍の平和的方面とは黄禍の経済面、また黄禍の戦争的方面とは黄禍の軍事面と言い換えられるだろう。鷗外は、黄禍の経済的な脅威も軍事的な脅威も罪は欧米人の方にあると言っている。この理由として、ヨーロッパの列強による中国侵略を挙げている。中国は 19 世紀において、イギリスをはじめとするヨーロッパの列強の侵略により、半植民地の状態に陥った。

そして最後に、欧米諸国の中国に対する恐れは影に対して恐れているようなもので、黄禍論は一種の臆病論だと批判する。

> 西洋人は日本人と角力[44)]を取りながら、大きな支那人の影法師を横目に睨んで恐れて居るのでござります。日本人を恐れて黄禍論を唱え出しながら、なあに、日本人がこはいものかと云つて居るのでござります。支那人がこはいものになるだらうといふのは、差当り影法師に過ぎませぬ。所詮黄禍論といふものは一の臆病論だといふことは、大略御了解になりましたらうと存じます。[45)]

サムソン＝ヒンメルスチェルナは、日本と中国を国土の面積や人口・政治・軍事的能力・宗教等の面で比較し、中国の優れている点について述べている。しかし鷗外は、中国の脅威を単なる影法師と言い、否定している。ここには、同じ黄色人種の国である中国に対する彼の対抗心がうかがえる。また、黄禍論を臆病論と揶揄しているところに、欧米諸国に対する強気の姿勢もうかがえる。

43)『鷗外全集』第二十五巻、567 ページより引用。
44) 相撲のこと。
45)『鷗外全集』第二十五巻、567-568 ページより引用。

4.2.　桑原隲藏の黄禍論批判

次に、桑原隲藏の黄禍論批判について見ていく。桑原は東洋史学者として、日本における東洋史学の確立に貢献し、中国史や東西交渉史の分野で業績を残した。

桑原は 1913 年 10 月に、「黄禍論」という論文を書いている。次の記述では、中国人および日本人の国民性に触れて、黄禍の軍事的な脅威を否定している。

> 第一支那人は世界無比の戦争嫌ひな平和的（？）人種である。彼等は軍人として尤も不適当なる性質を有して居る。［中略］かかる戦争嫌ひな支那人が、白人を迫害することは思ひも寄らぬ。日本人は支那人ほど平和的でないかも知れぬ。併し決して理不尽に白人を迫害する気遣ひがない。日清・日露の戦役によつて、日本を好戦国と評するのは、事実を誣ふる[46]こと甚しきものである。[47]

日露戦争後には日本が黄禍の脅威の中心と欧米諸国から見なされるようになるが、桑原は日本を好戦的な国家と見るのは事実から大きくかけ離れていると批判している。

「黄禍」という言葉が生まれたのは 19 世紀末だが、それ以前にヨーロッパ人にとって黄色人種の侵攻に対する警戒心の源になっている歴史がある。たとえば、4 世紀にヨーロッパに侵入しゲルマン民族の大移動を引き起こしたフン族や 13 世紀の蒙古の大侵攻などで、これらはヨーロッパ人の歴史的記憶に根を下ろしていた[48]。しかし桑原は、次の記述において匈奴[49]と蒙古を例に挙げ、日本人と中国人が彼らとは違うことを主張している。

> 古き歴史を観ると、匈奴とか蒙古とかは、一時アジア方面から欧州へ侵入したこともあるが、此等は沙漠の漂泊種族で、四隣を攻掠するのを一つの職業の如くして居つた蛮民で、日本人や支那人とは人種も相違して居る。決して彼此同一視すべきでない。[50]

46) 相手を陥れる目的で、事実ではない事を言うこと。
47)『桑原隲藏全集』第一巻、28 ページより引用。旧字体は新字体に改めた（以下同様）。注および下線は筆者による。
48) 橋川（2000）、7-16 ページを参照。
49) 紀元前 3 世紀末から 1 世紀末にかけて、モンゴル高原を中心に活躍した遊牧騎馬民族。
50)『桑原隲藏全集』第一巻、29 ページより引用。

桑原はさらに、「白人は歴史上・宗教上・社会上一大団結をなし易いが、黄人間にかかる大団結を起すことは先ず不可能である。黄人が一致して白人を迫害することは、容易に現実さるべきものではない」[51] と述べ、日本と中国が同盟してヨーロッパを攻めるという脅威も否定している。確かに同じ黄色人種同士という理由だけで国家が連合するだろうという考えは、いささか安直に思われる。実際、この後日本と中国は同盟をするどころか、1937 年から第二次世界大戦が終結する 1945 年まで再び交戦している（日中戦争）。

また、次の記述では、自分たちが最も優れた人種で世界を支配する権利があるという白色人種の思い込みを批判している。

> 白人は今日でも自分勝手に世界の最優等人種で、世界を支配すべき特権あるが如く信じて居る。この偏見からすべての事を判定する。黄人が彼等の言ふ儘に、なす儘になつて居る間は、苦情も出ぬが、黄人が覚醒して、幾分彼等の自由にならぬと、直ちに黄禍論を唱え、甚しきは黄人に対して謀反呼ばはりをする。それ程黄人が危険なら、黄人の住地へ近寄らぬがよい。無理に出掛けて来て、極東に通商を開き、或はその土地を占領しながら、黄人の危険を説くは、一つの滑稽といはねばならぬ。[52]

19 世紀後半から 20 世紀初頭のヨーロッパは帝国主義と呼ばれる時代で、先進的なヨーロッパが後進的な非ヨーロッパを文明化する使命を持っているという意識が広まっていた [53]。そのような意識から白色人種が無理やり黄色人種の国々を開国させて通商条約を結んだにもかかわらず、黄色人種の国家がそれによって近代化し強大になると今度は黄禍と呼び危険視するのは、理不尽だと批判している。桑原はまた、「黄人の白人に対する反感は、大抵の場合白人が黄人に対して何等の同情をもたずに、無遠慮な我儘勝手を行ふから起るのである」[54] と述べ、白禍が黄禍を生む原因だと批判している。

そして最後に、黄禍の存在を再度否定している。

---

51)『桑原隲藏全集』第一巻、29 ページより引用。
52)『桑原隲藏全集』第一巻、29-30 ページより引用。
53) 福井（2010）、200-207 ページを参照。
54)『桑原隲藏全集』第一巻、32 ページより引用。

白禍は存在するが、黄禍は毫も存在せぬ。黄禍の発頭人と目差されて居る日本人や支那人でも、各自の権利を保護するにすら力足らざる憾がある。白人を迫害する余裕のある筈がない。[55)]

桑原も鷗外と同様に、白禍は実際にあるが黄禍はまったく存在しないと主張している。日本も中国も自国の権利を守ることさえ危ういので、欧米諸国を攻める余裕などないと言っている。実際、東アジアの国家の中では例外的に欧米列強による植民地化を免れた日本でさえ、1858 年の安政の五ヵ国条約においてアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと修好通商条約を締結した際、領事裁判権を認めて関税自主権を失うという不平等な内容を強いられていて、これらを改正するために日本政府は交渉を重ね、領事裁判権は 1894 年に廃止され、関税自主権はこの論文が書かれた 2 年前の 1911 年にようやく回復されたのである。

5.　ベルツの黄禍論批判の特徴

以上、ベルツと日本人（森鷗外・桑原隲藏）の黄禍論批判について見てきた。最後に、本稿で取り挙げた三人の黄禍論批判を比較しながら、それぞれの特徴について考察したい。

黄禍論の喧伝に対しては、三人とも批判している。しかし、ベルツの場合は、黄禍論の日独関係への影響を常に心配している点が目立っていた。また、彼は特にヴィルヘルム二世の黄色人種や日本に対して露骨に示す嫌悪を、繰り返し批判している。

しかし一方で、ベルツは日本人の東アジアにおける野心を認めていた。この点において、ベルツは日本による黄禍が将来起こりうることを否定していなかった。また、欧米諸国にとっての黄禍の脅威として、日本と中国の近代化による強大化があったが、ベルツは当時の日本が欧米諸国に追いつくために、異常なほどの急速さで近代化を推進していることに対する驚きを日記に書いている。

この他に、鷗外や桑原と異なる特徴を挙げるとすれば、ベルツが黄禍論について述べる際、中国など日本以外の黄色人種の国家についてはほとんど言及していないことである。また、欧米諸国による白禍についても、ベルツはほとんど述べ

55)『桑原隲藏全集』第一巻、33-34 ページより引用。下線は筆者による。

ていない。

それに対して鷗外と桑原の黄禍論批判を見ると、二人とも黄禍は実際には無いと主張し、白禍は実際にあると主張している。二人の批判は、主に黄禍の存在やその正当性を否定することに向けられている点で共通している。また、彼らは黄禍論について述べる際、日本だけではなく中国など他の黄色人種の国家についても言及している。この点において、鷗外と桑原は、ベルツよりも広い視点で黄禍論について考えていたといえるだろう。

しかし一方で、鷗外と桑原の記述には、黄禍論により日独関係や欧米諸国との関係が悪化することに対する不安はほとんど見られなかった。鷗外の場合は、日本人が白色人種と対立するのは運命だと述べている。また、鷗外は黄禍論を臆病論と呼ぶなど、欧米諸国に対する強気な姿勢さえ示していた。これは、彼の講義が日露戦争開戦の 3 ヵ月前に行われたという時代背景も影響していたと推察される。実際、講義の中で「日露の間には恐らくは戦争が避けられぬであらうと、誰も信じて居りまする」[56] と述べている。

桑原は、日本人や中国人の国民性の説明を通じて、欧米人の黄色人種に対するイメージの現実離れを批判している。ドイツにおける日本のイメージも、日本の鎖国（1639-1853）や情報収集の困難さにより、19 世紀までステレオタイプにとどまっていたと言われる [57]。このような欧米人の日本のイメージと実際の日本との隔たりは、19 世紀後半に欧米諸国に流行したジャポニスムにも見られた特徴だった [58]。また、ゴルヴィツァーは、人間は自分の経験や知識が十分でないと必然的に簡約に考えるがスローガンはその極端な形だと述べている [59]。こうして見ると、日本を脅威と見なした黄禍論と日本を賛美したジャポニスムは、共通した特徴を持っているように思われる。

鷗外と桑原の黄禍論批判は、それぞれ異なる特徴もあるが、共通点の方が多かった。そして二人の黄禍論批判は、中国や白禍等についても言及していた点で、ベルツの批判よりも幅広い視点で行われていたといえる。しかし一方で、彼らが黄禍が将来起こりうることを否定した点については、その後の日本のアジア侵略や

56)『鷗外全集』第二十五巻、540 ページより引用。
57) Vgl. Delank (1996), S. 29.
58) 馬淵（1997）、20-22 ページを参照。
59) Vgl. Gollwitzer (1962), S.9.

太平洋戦争におけるアメリカ・イギリス等との交戦を考えると、完全に正しい意見だったとは言いがたいだろう。

6.　おわりに

ベルツは、本稿で取り挙げた黄禍論の批判を行った 1904 年の時点で既に日本に約 28 年間滞在し、その間に日本人女性の荒井花子（1864-1937）と結婚していた。また、当時来日したお雇い外国人の待遇は、給与の面でも住居の面でも非常に良かったと言われる[60]。そのような境遇にいたベルツが黄禍論を批判するのは当然のことと思われるが、批判の内容を当時の日本人（森鷗外・桑原隲藏）による批判と比べると、違いが多く見られた。

ベルツの黄禍論批判は、そのほとんどが黄禍論喧伝が日独関係にどのように悪影響するかという観点から行われている。そのことにより、ベルツが日本におけるドイツの評判をいかに気にしていたかがうかがえた。これはやはり、ドイツから招聘されたお雇い外国人という立場の影響が大きかったのだろう。そのことは、彼の黄禍論批判が黄色人種の国家の中でほとんど日本に関してのみ述べられている点からもうかがえる。

しかし一方で、日本の急速な近代化や東アジアにおける野心について述べているところなどは、お雇い外国人という立場にとらわれない客観的な見解がうかがえた。実際、ベルツは来日した直後の 1876 年 6 月 9 日付の日記に、「自分は幻想家としてではなく、厳正な批判家としてやって来た」[61] と書いている。ベルツは、黄禍論の人種差別的な面やそれによる日独関係への悪影響に対しては批判的だったが、日本による黄禍が将来起こりうることに関しては否定していなかった。その点において、彼の洞察は確かに厳正だったといえるだろう。

60) 梅溪（2007）、237-239 ページを参照。
61) Bälz (1931), S. 24. 日本語訳は菅沼（1979）、上巻 41 ページより引用。

参考文献

＜一次文献＞

Bälz, Erwin: Das Leben eines deutschen Arztes im erwachenden Japan: Tagebücher, Briefe, Berichte. Stuttgart (J. Engelhorns Nachf.) 1931.

桑原隲藏「黄禍論」『桑原隲藏全集』第一巻、岩波書店、1968 年、22 - 34 頁。

ベルツ、トク編『ベルツの日記（上）』菅沼竜太郎訳、岩波文庫、1979 年。

ベルツ、トク編『ベルツの日記（下）』菅沼竜太郎訳、岩波文庫、1979 年。

森林太郎「黄禍論梗概」『鷗外全集』第二十五巻、岩波書店、1973 年、535-568 頁。

＜二次文献＞

Delank, Claudia: Das imaginäre Japan in der Kunst. München (iudicium) 1996.

Gollwitzer, Heinz: Die gelbe Gefahr. Geschichte eines Schlagworts, Studien zum imperialistischen Denken. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1962.

Pekar, Thomas: Der Japan-Diskurs im westlichen Kulturkontext (1860-1920). München (iudicium) 2003.

飯倉章『イエロー・ペリルの神話』彩流社、2004 年。

飯倉章『黄禍論と日本人』中公新書、2013 年。

梅溪昇『お雇い外国人』講談社学術文庫、2007 年。

堅田智子「アレクサンダー・フォン・シーボルトと黄禍論」上智大学史学会『上智史學』第 57 号、2012 年、7-36 頁。

川島隆『カフカの＜中国＞と同時代言説 ― 黄禍・ユダヤ人・男性同盟』彩流社、2010 年。

木谷勤『帝国主義と世界の一体化』山川出版社、1997 年。

工藤章 / 田嶋信雄編『日独関係史 1890 - 1945』東京大学出版会、2008 年。

国立歴史民俗博物館編『ドイツと日本を結ぶもの ― 日独修好 150 年の歴史 ― 』（展示図録）、2015 年。

小林英夫『日本のアジア侵略』山川出版社、1998 年。

ゴルヴィツァー、ハインツ『黄禍論とは何か』瀬野文教訳、草思社、1999 年。

髙辻正久「第一次世界大戦以前の日独間の異文化体験」学習院大学ドイツ文学会『学習院大学ドイツ文学会研究論集』第 19 号、2015 年、199-226 頁。

島谷謙『日本を愛したドイツ人　ケンペルからタウトへ』広島大学出版会、2012 年。
デランク、クラウディア『ドイツにおける＜日本＝像＞』水藤龍彦 / 池田祐子訳、思文閣、2004 年。
野村幸一郎「アジアへのまなざし ― 鷗外・天心の黄禍論批判」岩波書店『文学』第 8 巻・第 2 号、2007 年、103-118 頁。
橋川文三『黄禍物語』岩波書店、2000 年。
福井憲彦『近代ヨーロッパ史』ちくま学芸文庫、2010 年。
馬淵明子『ジャポニスム ― 幻想の日本』ブリュッケ、1997 年。
和田博文他『言語都市国家・ベルリン 1861 - 1945』藤原書店、2006 年。

（たかつじ・まさひさ　学習院大学科目等履修生）

Die Kritik von Bälz an der „gelben Gefahr“ und ihren Merkmalen

Masahisa Takatsuji

Erwin von Bälz war ein deutscher Arzt, der 1876 nach Japan kam, um dort Medizin zu lehren. Er hielt sich bis 1905 in Japan auf und setzte sich für die Verbesserung der japanischen Medizin ein. In meinem Aufsatz betrachte ich die Kritik von Bälz an der im Westen verbreiteten Vorstellung von der „gelben Gefahr“.

Die „gelbe Gefahr“ ist die Meinung, dass die „gelbe Rasse“ für die „weiße Rasse“ eine Bedrohung sei. Sie verbreitete sich in Europa und Amerika vom Ende des 19. Jahrhunderts an bis zu Beginn des 20. Jahrhunderts. Die Bedrohung der „gelben Gefahr“ umfasste wirtschaftliche und militärische Aspekte. Die damaligen Europäer und Amerikaner fürchteten, dass die große Bevölkerung der „gelben Rasse“ und ihr Niedriglohn ihnen Arbeitsplätze wegnehmen würden. Und sie fürchteten, dass China und Japan ein Bündnis schließen würden, um die Länder Europas und Amerikas anzugreifen.

Seit 1895 propagierte Wilhelm II., der von 1888 bis 1918 Deutscher Kaiser und König von Preußen war, diese Gefahr. Dabei benutzte er ein nach seinem Entwurf 1895 von dem Historienmaler Hermann Knackfuß angefertigtes allegorisches Gemälde mit dem Titel „Völker Europas, wahrt eure heiligsten Güter!“, um vor der „gelbe Gefahr“ zu warnen. So verbreitete sich diese Einstellung in Europa und Amerika. Er war ein Verbreiter der Rassentheorie, der die Überlegenheit der „weißen Rasse“ behauptete. Anfangs wurde China als der Kern der „gelben Gefahr“ von den Europäern und Amerikanern angesehen. Aber als Japan 1905 den Russisch-Japanischen Krieg gewann, wurde Japan als der Kern der „gelben Gefahr“ angesehen.

Damals kritisierten viele Japaner, zum Beispiel Mori Ōgai, Okakura Tenshin u.a., diese Vorstellung von der „gelben Gefahr“. Und auch Bälz stimmte in diese Kritik ein. Was für Merkmale hat seine Kritik an der „gelben Gefahr“? Ich untersuche die Merkmale seiner

Kritik durch den Vergleich mit der Kritik einiger Japaner.

Bälz führte ein Tagebuch während seines Aufenthalts in Japan. In seinem Tagebuch gibt es Beschreibungen über die „gelbe Gefahr“ und seiner Sorge um die Verschlechterung der Beziehungen zwischen Japan und Deutschland. Er schrieb, dass die Japaner die Propagierung der „gelben Gefahr“ von Wilhelm II. als Beleidigung auffassen würden. Und er kritisierte den Abscheu gegenüber den Japanern und Chinesen, die Wilhelm II. hatte, und befürchtete, dass die Japaner daher die Deutschen hassen könnten.

Aber Bälz glaubte, dass manchem Japaner vorschwebte, dass Japan die Führung der Länder Ostasien übernehmen wolle und hier die Vorherrschaft anstrebte. Und er staunte über die schnelle Modernisierung Japans. Es erscheint mir, dass Bälz im Kern die „gelbe Gefahr“, ausgehend von Japan, nicht leugnen konnte.

Ein weiter Punkt stellt die Kritik von Japanern an der „gelben Gefahr“ dar. Ich behandle hier die Kritik von Mori Ōgai und Kuwabara Jituzo.

Mori Ōgai hielt eine Vorlesung über die „gelbe Gefahr“ im November 1903. In seiner Vorlesung betonte er, dass es die „gelbe Gefahr“ in Wirklichkeit nicht gebe. Im Gegenteil sagte er, dass es hingegen die „weiße Gefahr“ gebe und kritisierte den Einfall der europäische Großmächte in China. Er behauptete weiter, dass die „weiße Rasse“ im Allgemeinen Abscheu gegenüber und Argwohn vor der „gelben Rasse“ haben würde. Wenn sich die „gelbe Gefahr“ wirklich realisieren würde, so schloss er, läge die Schuld bei den Europäern.

Kuwabara Jituzo, der ein Forscher der orientalischen Geschichte war, schrieb 1913 einen Aufsatz über die „gelbe Gefahr“. Darin betonte er, dass die Japaner und Chinesen nicht kriegerisch und etwas anderes als Hunnen oder Mongolen seien. Er leugnete die Möglichkeit, dass die „gelbe Rasse“ sich vereinigen könnte. Außerdem sagte er, dass sogar die Verteidigung ihrer Rechte für Japan und China schwierig sei. Er schloss aus allem, dass es die gelbe Gefahr gar nicht gebe.

Wenn ich die Kritik von Bälz an der Rede über die „gelbe Gefahr“ mit der Kritik der Japaner an dieser Vorstellung vergleiche, finde ich einige Verschiedenheiten. Die Kritik von Bälz konzentrierte sich auf die Propaganda der „gelbe Gefahr“ von Wilhelm II.. Zwar kritisierten Ōgai und Kuwabara auch diese Propaganda der „gelben Gefahr“, aber sie

kritisierten hauptsächlich die Existenz und die Berechtigung dieser Vorstellung. Bei ihrer Kritik an der „gelben Gefahr“ erwähnten sie oft nicht nur Japan, sondern auch andere ostasiatische Länder wie zum Beispiel China. Wenn Bälz die „gelbe Gefahr“ thematisiert, dann erwähnt er fast immer nur Japan, selten hingegen andere ostasiatische Länder. Es erscheint mir, dass Bälz bei seiner Kritik an der „gelben Gefahr“ grundsätzlich die Beziehungen zwischen Japan und Deutschland im Auge hatte.